ドタバタ家族日記

篠原

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドタバタ家族日記

【Nコード】

N8247D

【作者名】

篠原

【あらすじ】

瀬崎樹。彼は色々な人から恐れられる裏社会現トップ瀬崎グループのボスだが、その裏、実は大の女好き。そのせいでたくさんの子供がいるのだが、多くの人から恐れられる彼はその子供に全く頭が上らず、毎日言うことを聞いてくれない子供達とのドタバタ格闘日記。

家族紹介

・瀬崎 樹（せざき いつき）自称 26歳

一応表向きは大企業の社長。裏では知らぬものはいないといわれる瀬崎グループのトップ。

ちなみに裏家業メインなので家訓は「闇に紛れて光を制す」

しかし女癖が非情に悪く、今わかっているだけで愛人が2人。子供は合計で7人。

そんな傍から見ると最悪最低な父親ですが、案外子供に愛されたい性格。

しかし何故かいつも空回り。

子供にかまって欲しい年頃（実年齢30歳 自称26歳）です。

・瀬崎 サラ 27歳

正妻

裏社会で4番目に勢力の強い社長の娘。樹と政略結婚させられるのに最初は反対していたが、お見合い時の樹の猛アピールに負け、結婚。

今ではまあまあ仲良くやっている。

基本放任主義

・瀬崎 雫（しずく） 16歳

正妻との間に生まれた長女。

基本マイペース。母親譲りなのか、基本放任主義者。しかし面倒見も良いので、よく末っ子や次女、父親の世話をしている。

・瀬崎 春奈（はるな） 15歳

正妻との間に生まれた次女。

体が弱く、気も弱い。

おとなしめの性格であり、人付き合いが苦手。

・瀬崎 正樹（まさき） 13歳

正妻との間に生まれた長男。

本来は、跡継ぎにと父親と同じく”樹”の字を入れ、もの心つく前から少しづつ裏社会のルールを教えていたりしたのだが、いざ育つてみると何故か跡を継ぐことをかたくなに拒否。

メンドクサイことが大嫌いな性格で、あまり人と深くかわらうとしない。

・瀬崎 真人（まこと） 10歳

正妻との間に生まれた末っ子。

なぜか未だに性別不明なため、男女両方に通じる名前を命名。

ちなみにもし男ならば跡継ぎ候補確定者・・・だと思われているが、なかなかの問題児でいつも長女と父親の手を煩わせている。

・岩野 夢月（いわの むつき） 28歳

一番目の愛人

政略結婚が決まったと同時に縁を切った。

だが、今でも普通に交流している。

体が弱いがいつでも明るい性格の持ち主

・岩野 梨香（りか） 16歳

一番目の愛人との間に生まれた長女

母親譲りでいつでも明るく真面目な性格。

とても明るく正妻のところの子供達と仲が良い。でも父親には反発気味。その場の雰囲気により変わる。

・岩野 美佳（みか） 15歳

一番目の愛人との間に生まれた次女

母親と父親の腹黒いところだけを色濃く受け継いでいるいつでもマ
イペース少女。

父親や、姉の梨香を苛めることが大好き。

根は優しいのだが、いつもは腹黒モード全開。

・瀬籐 侑紀（せとう ゆうき） 15歳

二番目の愛人との間に生まれた長男。

しかし14の時に母親が倒れ他界し、今では母の妹方でお世話にな
っている。

そんなこともあり、毎日ほとんどバイトをしてすごしている。（毛
嫌いしている父親を頼りたくないの）

・瀬籐 由紀（せとう ゆき） 28歳

二番目の愛人。

侑紀を生んでしばらく女手一つで育ててきたが、高校に上げる前に
過労死。

最初は樹と仲良く暮らしていたが、裏会社の社長だと知って縁を切
りそのとき身籠っていた子供と一緒に行方をくらしアパートで暮
らす。

しかし、女手一つで育てるには限界がありついに侑紀が高校生に登
る前に他界。

ありえない年齢で子供が生まれていることになっていますが、まあ、
パラレルなんで。

家族紹介（後書き）

これから連載頑張っていこうと思っているので、応援してくれる方がいてくださればとても嬉しいです！

家族旅行「始まり」

「久しぶりに休暇がとれたぞ〜!!」

そういいながら黒コートにサングラスをかけた男、樹が入ってきた。

そんなことがあったのが数日前。

「何処行くのさ?」

「ちよつとしたツテで、今回はネズミーランドだ!!」

「やったア!! ありがとうとおとーさん」

「あつはつは、愛してるぞ我が子よー!!」

そういつて樹に飛び込んできたのは、何故か10歳になった今でも性別がハッキリしていない末っ子、真人だった。

性格はどちらかというと女という感じもしなくもないのだが、見た目、行動はまるっきり小学生男子のようなもので、今でも父親と騒いでいた。

そうして、しばらく二人でギャアギャアはしゃいでいると、その大気ない父に何気ない質問をぶつける声がした。

「ところでお父さん、いつ頃行くの?」

質問してきたのは体の弱い次女の春奈だった。おずおずと聞くが、樹は春奈の頭をなでて安心させるようにし、元氣よく言う。

「お前等の学校、もうすぐ長期休暇に入るだろ?入ったらすぐ行くこ

うな！」

「え、めんどくせえ」

そう間をおかず即答したのはソファで雑誌を読んでいる少年、長男の正樹だった。

正樹は雑誌から目を離さず愚痴をもらす。そんな正樹に樹は、抱き合っていた真人をゆっくり下ろし、正樹の近くによって首をかしげながら訪ねる。

「なんだよ正樹、どこが気に入らないのさ？」

「めんどくさいじゃん、俺人が多いトコ嫌い」

「それなら大丈夫！！なぜなら！！（金とコネと権力で）3日間貸切にしたから」

「お前……」

「パパと呼んでくれ」

「て、というか何貸切って！！？なんでまたそういう目立つことを！」

そう、樹にモノを投げつけた少女、長女の雫は勢いよく怒鳴る

樹はそれをさらっとかわ……しきれずド派手な音を立ててころぶがすぐさま立ち直り、今度は雫の傍に行くと、

「ははは、見たかお父さんの権力」

と言いつつ雫にピースをしてみせる。

一方雫のほうは、呆れ顔でその手を払い落とす。

「最悪だね……」

「そう硬いこというなって」

「でも、ヤだよ。またマスコミとか来て学校で騒がれるの嫌なのよ」

そう、聞いた瞬間。樹は無言で召使を招き電話を持ってこさせ、どこかに電話をかけ始める。

何度かコール音がし、あちらで電話を取る音がした。

「おい、私だ。．．．ん？誰かだと？私だっつてんだろぅが！．．．そんなことより、社長を出せ。今そこにいんのはわかってんだよ！．．．」瀨崎が出せと言っている』とさえいなくても出てくる。いいからだせ！．．．オイ、テムエ次ウチの可愛い雫の学校に取材なんかきやがった日にはお前とコンクリー緒に海に沈めっぞ。あ”あ？取材の記事がないと困るだア？」

樹が突然黙り、他の召使を呼び黒い革張りの手帳を持ってこさせる。そして受話器を肩と首のトコで挟みその手帳をペラペラめくり始める。

しばらくして、ようやくお目当てのページに行き着いたのか、再び受話器を手にとり話を再開させる。

「このあいだ、証券会社の社長が謎の病気にかかったことは知ってるな？．．．ああ、そうだ。その社長．．．あと数週間後何か起こるぜ？．．．そうだ。今のうちに取材にいったりして損はねえと思うが．．．ああ。そうか。雫の取材は急遽取りやめだな？．．．それはよかった。．．．それではな」

ガチャ

「と、いうわけだ。取材もないし、警備には最高のものをおくから安心して旅行に．．．グフオツ！！」

そう先ほどとは違ってかわってとても良い笑顔で振り返った先には、跡継ぎのための訓練やそういうスパルタ生活を強いたわけでもないがそこにはしっかりと力のこもった鉄拳があった。

「お父さんの馬鹿ッ！」

最近成長期の途中なのかだいが背ものび、母親に似てきてとても美人にそだつてきたと思う長女のこぶしは、丁度鳩尾にきまり、樹はうずくまって唸る。

「だからそういう目立つようなことはやめてって言うてるのに!!」
「す、すみません・・・」

「次からそういうのやめてよね！」

「はい・・・」

「全く・・・第一あんな広いテーマパーク岩野叔母さんと侑紀君連れてつても余るし!もったいないじゃん!」

そういう問題だったのか?とその場に居た全員は思うがあえて口にはしなかった。

しかし、その中で勇気ある父一（気づいていないだけ）が名案とばかりにくちにする。

「その辺の心配ならご無用!なぜなら警備兼社内旅行としてわが社の有能なる社員が数十名くるから!!」

「あ、そうなんだ・・・」

「よし!これでみんなの悩みもなくなったことだし!!家族旅行決定!!!!!!」

そう決定したのが一昨日

「夢月か?ああ、二日後ネズミーランド行く!準備しとけよ?」

「侑紀？二日後な、母さんの大事な事、言い忘れてたから・・・三日ほど時間、くれないか？・・・ああ、そうだ。じゃあ・・・」

そうお誘いをしたのが昨日

「じゃあ！旅行に必要なものを買うお小遣いをくばりまーす！変なもの買っなよー」

「ありがとうお父さん！」

「結局行かなきゃならねえのかよ・・・」

「ありがとうお父さん」

「ありがとう・・・」

「樹父さんからお小遣い届いたわよ？」

「ありがとうー！」

「ありがとうーでも、お父さんも馬鹿だねvまたこんな変な企画して」

「これ。樹お父さんから手紙届いてるけど？」

「あ、叔母さんスイマセン、ちょっと諸事情で三日ほどあけます」

「そう？気兼ねしないで行って来てね。気をつけて」

「？はい。ありがとうございます」

そんなことをしたのが今日の話

そして迎えた当日

「久しぶりーおとうさんー！！」

「久しぶりだな愛しい我がコオー！！？」

「お父さん・・・また突撃くらってるよ」

「あれってこの間栗ねえちゃんがやったところじゃね？」

「いたそう・・・」

「ってちよつとまで！！なんだその旅行風景！！聞いてないぞ!？」

「ああ、侑紀。会いたかったよ我が子ー!!!」

「待てっつってんだろぅが！！だからちよつと待て！母さんのこと
で話があるっっていうからきたんだぞ!？」

「ああ、アレ？あるっちゃあるけどないっちゃんない！！嘘です!!」

「帰る」

「ぎゃああ!!!ごめん侑紀ー!!!帰らないでーッ!!!」

「どつりでおばさんの顔がにやけてると思っただ！昨日買い物い
って色々買ってきたっばいわりに秘密とか言ってくるし!!夕方変
な宅配便くるし!!!」

「おお！よくわかったな。アレが荷物を引き取りに来た私の部下だ
と」

「お前・・・どこに荷物を受け取りにくる宅配便屋がいるんだよ！

!..!」

「・・・さて、全員そろったことだし、出発ー!!!」

「ごまかすな!..!」

そんな最初から心配の種が尽きないドタバタ家族旅行がスタートす
る。

「テメエ・・・絶対覚えてろよ・・・」

「あつはつは、謝るからそんな怖い顔しないでくれよ侑ちゃん」

「(ぜってえシメてやる・・・)」

家族旅行―始まり―（後書き）

久しぶりにこんな小説でごめんなさい。

しかもイキナリ旅行ものです・・・

でも、コレをみて笑える・・・かどうかはわかりませんが、笑っていただけたらありがたいです。

三日間は、一家族つつ書いていこうと思っているので、これからもお付き合いしていただければありがたいです。

家族旅行「到着！」

「到着！！！！！！！！！！」

バスに揺られる事3時間。

その3時間の有意義な過ごし方が、

我が愛娘（&愛息子）と楽しく遊ぶ（正：遊ばれている）事2時間30分。

お腹がすいたといわれ、途中高級レストランからシェフを連れてきて食事させること30分。

いつもかまってやれなかった分、今日は沢山子供たちと遊ぶ（正：遊ばれただけ）事ができて、父さん。とってもうれしんだが・・・

「ついた瞬間置いてけぼり・・・orz」

そんなガツクリうなだれる父の心知らず、子供たちはいつせいに色々なアトラクションへと散らばっていった。

皆ほぼバラバラに散ったので追いかけるわけにも行かず、一瞬にしてその場には樹と侑紀しか残っていなかった。

「ゆーうちゃあん・・・」

「んな気色の悪い目で見んな。そしてすぎるな」

「お父さん最近子供たちとのコミュニケーション取れなくて寂しいよ・・・」

「ハッ、自業自得だな」

そういい捨てると、侑紀もまた園に入ると何処かへと姿を消してしまった。

ついに誰も居なくなり、樹は本格的にバスで出来た影でいじいじし

ていると

樹が隠れているバスの隣にもう三台新しいものが来、それが止まった瞬間、中から大勢の人たちがまるで軍隊の訓練を受けたかのように動き、すばやくいじけている樹の前に綺麗に整列をし始めた。

そして約15秒後全てが終わると代表役のような人が三人、さらにその前には後ろに控える隊の総隊長らしき人が一人、その列の前に立つて敬礼をし、

「樹様ツ！特殊班30名全員集合完了しましたッ！！」

「同じく、医療班15名全員集合完了しましたッ！！」

「同じく、精鋭部隊『らん鸞』10名全員集合完了しましたッ！！」

「樹様が御呼ばれになった者、コードネーム『ひくいな緋秧鶏』55名すべて到着しました」

順々に樹に報告をした。

そして、最後に総隊長がそう言い終わると、先ほどまでバスの陰でウジウジしていた樹がスクツと立ち上がると

ゆっくり『ひくいな緋秧鶏』の方へ向く。と

「いいかッ！！今回の使命は何時もと違って大事なもんだッ！！」

いつもと違い、ドスの聞いた声で叫ぶ。

「テメエ等もし俺の家族に擦り傷ひとつついてみるッ！その時は担当者はもちろん、その家族担当全員明日の日は拜めねえと思えッ！！」

「ハッッ！！！！」

「けどな。俺も鬼じゃねえ！！担当以外、非常時以外なら好きに遊んでかまわねえからな！たっぷりはしゃぎやがれ！！！！」

「ありがとうございますッ！！！！！！」

「わかったら。散れッ!!」

そう樹が言った後、三部隊とも園の中に入っていった。しばらく騒ぎ声がそこらじゅうに響いたが、すぐに収まる。そうして、そこにはリーダーらしき人物と樹が残った。

リーダーらしき人物はそこから一步も動かず、ずっとその場におり、樹もしばらく仁王立ちでじっとしていたのだが、もともと騒ぎ好きな性格なため、そんな無言の雰囲気になんて耐え切れず、

「芝崎^{せはし}、お前はいいかないのか？」

「私は樹様のお目付け役です。」

「いや、俺は愛する我が子と一緒に回りたいのだが」

「そして、樹様が無茶をして侑紀様や梨香様、美佳様にご迷惑をおかけしない様に私がいるのです」

「・・・チェンズ」その命令は却下いたします」

樹は提案とばかりに隣ですっと立っている芝崎の方へ向くが、芝崎は相変わらず園の方を向いたままバツサリと切り捨てる。

「さあ、ぐずぐずしてないで行きましょうか」

「・・・せめてもう少し色気を出してくれてもいいんだぞ・・・？」

「遠慮いたします。それに、私は一分一秒でも暇があるなら樹様にたまっている報告書の確認と今後のスケジュール確認、依頼内容の確認などをしてもらうので、このように」

そう言いながら芝崎は機能性抜群のすこしゆったりしたGパンを引っ張ってみせる

「樹様が逃げられてもすぐさま追いかけられる物でない・・・」

「せめて、最近のファッションに則ってちょっと破けているのか・・・」
「あんなもの、追いかけているうちのハンデになるとしか思えませんが。どこかに引っかかりたりずれたり、その隙間を狙われたらどうするのです。私にはまいち最近のファッションが理解いたしかねます」

芝崎はそう言い切ると、樹はため息をつきながら

「芝崎・・・お前ほんとに女か？」

「まあ、一応生物学上。というより私が女ではなければなんだとお思いで？オカマにでも見えますか？」

「お前、見目は美しいんだがな・・・性格がな・・・せめてもう少し女らしく・・・」

「さ、樹様。さっさと行って書類整理してください」

そう言って芝崎は、樹の首根っこをガシツとつかむとずるずる園の中へと連れて行った。

「え！？ちょ、遊園地って遊ぶためにあるんだよな！？」

「あんな子ども用です。あなたは少々勉強が足りない」

「お前、ホント俺にも容赦ねえな・・・」

「私を首にでもしますか？」

「いや。女だし、美人だし、有能だから許す」

「それはありがとうございます」

芝崎はずるずると樹を遠慮なしにひこずりながらそういった。が、

その顔は、太陽のせい、少し赤く染まっていたのは誰も

しらない

番外編―父の子育て日誌―

三月 某日

最近、可愛がりながら育てた愛娘（&愛息子、末っ子）がやけに冷たい（ついでに正妻サラも

どうもおかしいと思い、部下のリユウに聞いてみると、ようやく合点がいった。今度アイツの給料をUPしてやろう。

その理由は・・・

子供が・・・反抗期に突入した。

最初は上手くかわされる程度だったが、最近では暗殺者（まあ、まだ新米レベルだが）並に気配が無く、驚かすというよりは襲うの方がピンと来るような悪戯をしかけてくる。

さすが我が子だ。ちゃんと教育すればきっと良いアサシンになるだろう。血のつながりは素晴らしい！天性の才能だろう。

特に、真人と梨香は凄い。

私の倉庫から盗ってきたのか、普通のワイヤーよりは強度があり、釣り糸より目立たない特注でつくらせたワイヤーに引っかかると上から異臭も触った感じも普通の水と見間違えるほどのガソリンが上から落ちてきて（ポリタンクごと）仕上げに、私が驚いているところから上から火のついたろうそくまで落ちてきた。

さすがにギリギリでよけることができたが、先ほど引っ掛けたワイヤーがいつの間にか足に引っかかっていたのでさっき落ちてきた火がそれを導火線にこちらへ向かってきて、さすがに焦った。

そして、結局逃げ遅れ火だるまになってしまい、専属の病院へ運ばれた。

私もやはり年には勝てないのかと思った。

すぐに退院できると聞いたので、詳しく医者に聞いたら、
「樹さんは再生能力がすばらしいので明日ぐらいには治るでしょう」と言われた。
ちなみに、普通の人間だったら入院生活一週間らしい。やっぱり私もまだまだいけるなと思う。

そういえば、私の倉庫は嚴重にセキュリティをかけている（この間警察の家宅捜査にも発見されなかった場所にある上、蚊一匹入る隙のないところの）ハズなのに真人と梨香はその場所を見つけ出し、さらにその嚴重なセキュリティをあけるなんてさすが我が子だ。きつと良いトレジャーハンターか立派なアサシンになるだろう。良い事である。

おそらく場所を見つけたのは真人だろう、あの子は情報を集めるのが子供たちの中で飛びぬけうまい。
もし女であれば、表の事業を継がせることができるかもしれない。楽しみである。

ということは、セキュリティを空けたのは梨香か。
あの子はいつもそついうそぶりは見せないが、いざというときの判断力と知能が高い。
もし男だったら瀬崎グループを継がせることができたのに・・・惜しい事だ。

最近では少々いたずらが過ぎるが・・・まあ、子供とはそついうものだ。
私も若いころは無茶をして本庁に爆弾を送っておこられたものだった。
子供のころが懐かしい。

きっと、子供たちも私のことをわかってくれる日がくるだろう。
楽しみに待つことにする。

それまでは、私も反抗期に負けずがんばろうと思う。

樹

家族旅行―瀬崎家編―

「正樹みーっけッ!!」

ガバッ

「寄るな変態ッ!!」

バキッ!!

しばらく見ないうちに、息子が汚い言葉を覚えました。

しかし、しばらく放置してもお父さんが言ったこと覚えててくれたんだね！パパは嬉しいよ！
でも、

「正樹酷い!!パパに向かって鳩尾に肘あてくらわすなんて!!」

そう樹は腹をさすりながら正樹に言っが、無視された揚句遅れて着いてきた芝崎にも

「樹様。先ほどの明らかには正当防衛が成り立ちますが」

「家族との間に正当防衛などという言葉はない！ちなみに俺の頭にはそもそもない!!」

「チッ、なんだ親父か」

「今正樹チッて!？」

文句（正論）を言われ、入る前と同じようにしょぼんとしていた樹だが。

「おとうさーんVVどうしたの？そんなところで？」

「おお！MY エンジェル！会いたかったよ真人」

「おとうさーん。しっかりしてえー（頭）、大丈夫？」

「やあ雫 パパはいつでも元気だよ」

すぐさま後ろから抱きついてきた末っ子真人と長女雫の顔を見るなり元気になり、

「いやあーどうだい？久しぶりのお父さんとの遊園地は？満喫してる？」

「うん！楽しいよ！！お父さんありがとうー」

「まあまあね」

「楽しい、です」

「うん」

とりあえず気を取り直して感想を訪ねてみると、案外素直な答えが返ってきて、更に舞い上がった。が

「とりあえず、お前がいなけりやもうちよつと楽しいかもな」

長男正樹によつてたたき落とされることになる。

そのままフンツとそっぽを向いた長男に樹は

「正樹いゝお前、どうして最近パパにそんなに冷たいんだい？」

パパは悲しいよと付け足しながらすがりつく。が

「寄るなつつつてんだろうが！クソ親父！！！」

「まあ、正樹！お下品な！」

「一片死ねよ親父」

回し蹴り（回避したが）が見事樹の頭（があつた場所）へと飛んできた。

しかも、そのあと捨て台詞？を述べてそのまま去っていく。

そんな後ろ姿に樹はまるで捨てられた子犬のような眼をしていた。

という・・・（by 隼）

そして、それを遠巻きに見ていた瀬崎一家。しかも、子どもたちは終わったと見るやまた地図を広げて次行く場所をみんなで楽しそうに決めている。

そんな姿も可愛いよ、娘たち。だが、パパは何故か寂しいよ・・・

ちよ、目から汗が・・・

てか、正樹。何で、何で

「なんであんな子に育つちゃったんだろうか・・・正しい後継者につてことで小さい頃から修行だつてやらせたし、一番手ほどきしてやったし・・・パパの名前だつて入れたのに・・・」

そうひとり（隅っここのじめじめした影の方）でウジウジしていると、いつの間にか後ろに来ていたサラに、肩をぽんっと叩かれ、超満面の笑みで

「お父さんの名前、入れたからじゃない？（ニッコリ）」

天使の笑顔で死刑宣告を告げた。

その言葉を聞いた瞬間、樹は石化してどこからかヒビが入ったような音がしたとかしないとか。

そんなこんなで、結局サラはそのあと石化した樹のことはモロ放置で、子供たちに呼ばれるまま一緒にどこかへと消えてしまい、その場には

「樹様？樹様。そんなところに居られてはほかの方々には迷惑がかかります。モニュメントになりたいのでしたらあちらの隅に移動してください。樹様？」

「サラが・・・正樹が・・・雫に春奈に真人も・・・orz」
「・・・」

溜息をつきながら、ひとまず移動させるべく上司というのにもズルズルとひこずりながら、そばにあった休憩所へと連れて行った。

結局、なんとか回復した後でも瀬崎一家はまるで雲隠れしたかのように見つかることはなかった・・・

家族旅行―瀬崎家編―（後書き）

久しぶりでごめんなさい・・・

本当はもう少しあったんですけど、色々な理由により削除して、なんとというか凄いきみしい文章になりましたが、楽しんでいただけたら大変嬉しいです。

これからも、こんなのでよろしければお付き合いしていただけると大変嬉しいです。

それでは

家族旅行 岩野家編 (前書き)

急ピッチで仕上げたものなので、今度手直ししようと思っています。
なので、直すときに話が変わる可能性があるので、これは次の話を
書く際の一つのネタとして見ていただけると嬉しいです。

家族旅行 岩野家編

「次、どうする？」

「んー…私、アレが乗りたい！」

「じゃあお母さんここで待ってるから、二人で行ってきなさい」

そう言うと、二人の子供は元気よく返事をして目当ての乗り物へと駆けていく。

その様子をほほえましそうに見ていた女性は、子供たちの姿が見えなくなると近くに置いてあった休憩用の椅子へと腰掛ける。

そしてようやく一息ついたところで、

「その美しいお嬢さん、お飲物などいかがですか？」

突然、スツと横からジュースを差し出される。

そのことに驚いた女性だが、ジュースを差し出している本人を見て、ホツと胸をなでおろす。

「ありがとう、樹さん」

そこにいたのは、先ほどまで散々子供たちにからかわれていた樹の姿があった。

樹は、そのままジュースを女性 夢月に渡し、自分もその隣に腰掛ける。

「樹さんだなんて。ダーリンでもパパでもあなたでも、どれでも大歓迎だよ？俺は」

「いえいえ、そんなことしたらサラさん怒るんじゃない？」

「いや？サラはよくできた妻だよ。俺がどこ行ってもちやーんと戻って来ることを知ってるから、ちょっとぐらい遊んでも怒らない」

「そうなんですか」

「だから遠慮せずどーんとダーリンって呼んでもいいんだぞ」

「考えておきますね」

夢月はそうふんわりと笑って返すと、それにつられて樹もにこりと笑う。

そんな、ほのぼのとした一時だったが

「あーおとーさんだ」

「あ、ほんとだ。甲斐性なしだ」

それはすぐさま帰ってきた子供たちの声によって、跡形もなく消え去った。

「おお！梨香と美圭じゃないか！！元気にしてたか？」

「うん」

「お父さんは？また、知らない女の人に手を出してる？」

「…それは元気がどうかと関係あるのかい？」

「お父さんが女の人に手を出さないなんて元気じゃない証拠じゃない」
「い」

「むしろ地球崩壊の危機だよ」

「ねー」

「…2人が仲良く、元気そうでお父さん嬉しすぎて涙が止まらないよ……」

「あらあら」

心なしかこちらでもだいぶいじられているような気がしないことも

ないが、久しぶりの我が子の姿に、樹は自然と舞い上がる（先ほど地にたたき落とされた気もするが

それは後ろからようやく追いついた芝崎にも読みとれたようで、しばらくはこのままにしておこうと、元来た道を再び戻ろうとしたが

ピピピ。ピピピ。

「?これは…」

その時ちょうど入った定時連絡ではない、緊急連絡がかかってきたことによってその配慮は無と化すことになる。

急いで再び樹のもとへと向かおうとするが、先ほどまで家族水入らずでやっていた場所にその姿はどこにも見えず、芝崎はそのことに気づき戸惑う。

「ボサボサするな。エマージェンシーが入ったんだろう?行くぞ」

「ツ!!!?樹様!!!」

だが、急に後ろからかけられた声にハッと我に帰った。

そして、普段ならばみられないような部下の姿にすこしだけ笑うと、樹はそのままだこかへと歩き出す。

芝崎も慌てて樹の後を追いかけて、隣に並んだところで

「どうした芝崎。普段のクールさがなくなってるぞ?こいつは緊急事態こそ、落ち付き冷静に事をおこなねば」

「…はい、申し訳ありません」

「いいさ。で?どうしたって?」

「いや、あの…そんなに大したことではなさそうなので…わざわざ樹様が出ずとも、私たちでなんとかいたします」

「ん?仕事魔の芝崎が珍しいな。どうした」

「いえ。久しぶりの家族水入らず、それを邪魔するのは、少し…」

その言葉に逆に樹がキョトンとするが、しばらくして言葉の意味を理解するとふっと笑う

「いいさ。梨香には『お父さんお仕事あるんでしょ？なら、さっさと行って片付けてこなきゃ』って言われたし、美圭には「

『あー…でも、アレぐらいなら別にお父さん行かなくても大丈夫だろうと思うんだけどな…』」

『ダメだよ』

『美圭？』

『お父さんから仕事と浮気癖とつちゃったら何も残らないじゃない。唯一の…そこだけはいいとこるなんだから』

『うわーい、お父さん頑張ろうかなー』

「って、言われちゃったし」

「つまり、娘にカッコいい姿を見せたいんですね」

「いやーアレは『さっさと行け！』って感じだったな。いや、ほん」と良い目をしているよ。ウチの娘は「

「そつですね…」

すこし呆れるものもあるのだが、芝崎はそれを聞いてさきほどのためらいを捨てると、すぐさま気持ちを切り替える。

「緊急連絡は、どうやらちょうど休憩中の班から回ってきたようです」

「どうした？侵入者でもでたか？」

「はい、恐らくはそつではないかと…」

「恐らく…」

「実は、途中で連絡が途絶えてしまったらしく…今、急いで確認に

行っておりますが未だ何も」

「そうか。だが、精鋭部隊を連れてきたつもりだったが、こついても簡単にやられるとはな。俺も落ちたものだ」

「いえ、それは私の落ち度です。申し訳ありませんでした」

「いや。そんなことないさ。さて、芝崎」

「はい」

樹は、そう芝崎に声をかけると、一度大きく深呼吸をして振り返る。その目は、先ほどの家族と楽しんでいたような柔らかい目ではなく

「狩りの時間だ」

野生の、獣のような目つきになっていた。

家族旅行 岩野家編 (後書き)

腹黒がわかりません。難しいよ腹黒。

今回は、いつもかわいそうなお父さんをちょっとかっこよく書こう
と思って挫折した結果です。

もう無理だと思う。

そんなこんなで、だいぶお久しぶりですごめんなさい。

長らく放置してたので、これからまた少しづつ頑張ろうか思っ
ているので、まだ読んでやるよって人がいてくれれば、これかもお
付き合いしてくださいなれば嬉しいです。

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました。

家族旅行―問題発生―（前書き）

しばらくすぎてスイマセン。

キャラをだいぶ違う感じにちよこつとずつ変えていこう計画してるため、前の方がいい！と言う方は見ない方がいいかな、と。

全然大丈夫って方はどうぞ

家族旅行―問題発生―

緊急連絡が入ってから数分。距離があつたこともあつて、出遅れたがようやく目的地が見えてきた。

「芝崎」

「この辺りですけど…樹様ッ!!」

詳しい場所の特定をしようと思ひ、後ろを走る芝崎に振り返つて聞く。すると何か言つたわけでもないのに芝崎は心得ているかのよう

にその答えを口にした。本当に彼女は優秀だ。しかし、そんな芝崎の顔が次の瞬間、普段滅多に見る事もない慌てた様子へと変わった。

「お前ら!!どうした!!!!」

芝崎の指さす方向。そこには、部下数名が見事に地に伏せていた。命には別状はなさそうだが、相当くらつている。我が組織でも優秀なメンバーを集めたつもりだったが…

どこのどいつかしらねエが、こりゃ相当な兵にやられてんな…クソッ!

樹は心の中で大きく舌打ちした。するとちょうどその時、わずかながらに意識がある部下を見つけて、樹は慌ててその部下の元へと駆け寄つた。

「おい、大丈夫か!?!」

「…っ、い、樹、さま…なにものか、ゲホッゲホッ…!!」

「いいからしゃべるな!! 芝崎ッ!!」

「至急、救護班を呼びます…ッ!!」

「ちが…い、つき、さま…おれら…ゲホッ…」

「もういい! しゃべんじゃねエ!!」

そう諭すが、部下の一人は懸命に何かを伝えようとする。それが何を示しているのか、それはすぐさま理解できた。

「C、チーム、です…ゆ、きさま、がつ…ゲホゲホッ…!!」

「侑紀?…お前ら、侑紀担当チームか!!?」

今回家族は3組。それぞれA・B・Cと分けてCチームは侑紀担当。本来ならば熟練のメンバーが守る手筈だったのだが、たった一人じや寂しかろうと、精鋭と言ってもまだ若い、年の近い奴らをCチームに集めたのが仇となった。

樹の言葉に、必死に動かない体に鞭打って首を縦に振る部下の姿に、当たってほしくもない答えが見事当たってしまったって、心の底がどんどん冷えつく感じがする。

まるで、氷をそのまま飲み込んだみたいだ。

護衛であるCチームはここにいる。

じゃあ、侑紀は?

この護衛を倒した奴がウロつく園内に、一人?

サアツと血の気が引くのがわかる。

樹は、一瞬なんのことか理解できず、否、理解したくなくてその場

で固まる。

そして、

「芝崎！後は頼んだぞ！！！」

「樹様！？お一人でどちらに行くんですか！！？樹様！！！」

部下をその場の芝崎に託し、制止の声など聞こえぬふりをして、樹は持てる限りの速度でこの辺りにいるであろう侑紀を探す。

敵に自分の居場所がばれるなんてしまったこっちゃない。

来るならきやがれ。お前らの狙いであるおれはここだぞ。

必死に可愛い息子の名を叫びながら走り回る樹の姿は、暗殺のプロという影なんて微塵も感じられなかった

「侑紀！！！！どこだ！！！」

いまだ見つからない息子に、冷や汗を垂らしながら樹は見落としのないようにあたりを見回す。

しかし、影も形も見えない。

敵が敵だけに、時間がたつたび嫌な予感も膨れ上がる。

樹は、そんな考えを打ち払うように頭を振って、もう一度探しに戻ろうと踵を返した。

そして、角を曲がるうとした時、

ピュッ

「ッ!？」

突然、音もなく表れた蹴り。

侑紀のことで頭がいつぱいで、落ち着きも冷静さも欠けていた樹はその存在に気付く事が出来ず。

「くっ!」

なんとかガードの腕ははいるが間に合わない。

その思い蹴りによって樹は、いとも簡単に吹っ飛ばされた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8247d/>

ドタバタ家族日記

2010年10月28日04時04分発行